

創作テレビドラマ大賞 最終候補作品

「ロスト チルドレン」

桐乃さち

○ 梗概

荒木和馬（18）はパチンコ店に入り浸り、タバコを吸い、高校もさぼりがちの荒れた生活を送っていた。母親はキャバクラで働きながらホストに通い詰めており、妹との生活は荒木のアルバイト代で支えられている。

ある時、パチンコ店でタバコを吸っている荒木に絡んできたのは、蔵王洋子（85）。洋子のせいで、荒木はパチンコ店に出入り禁止になる。妙に羽振りの良さそうな洋子は、パチンコ店の大株主だと言う。

荒木が家具の運送のアルバイトで出向いた先は、洋子の家だった。洋子は都会の一等地で、広い家に一人で住んでいるようだった。

妹が大学進学を希望している為、荒木は運送会社の正社員にしてもらえよう掛け合い、卒業後に就職出来る事になる。

パチンコ店に出禁になった為、ゲームセンターで遊んでいると、洋子がやって来る。洋子が客に絡み、喧嘩になりそうになる。荒木

は洋子をかばって喧嘩になり、客に殴られる。
荒木は警察に補導される。

高校は停学処分となり、自暴自棄になった
荒木は、勢いで退学してしまう。そのせいで、
正社員への道も閉ざされる。

そんな折、母親が悪い筋から金を借りてし
まい、500万円用意しないとソープに売り
飛ばされる事になる。

母親を見捨てようとしたが、どうしても出
来ない荒木は、洋子の家に泥棒に入る。

洋子を縛り上げ家を物色する荒木。洋子は、
戦後の混乱期を、泥水をすすするような生活を
してここまで生きて来たと言う。「生きる為
なら何をしてもいい。だけど自分の為に生き
ろ」と言われる。荒木と洋子は、生きる為に
全てを捨てた者同士の絆を感じる。

荒木は金を持って逃げる。母親の所へ行こ
うとするが、洋子の言葉を思い出し、自分の
人生はこれでいいのかと自問自答する。昇る
朝日を浴びて、違う人生を歩む決心をする。

○ 登場人物

荒木 和馬（18） 高校生

蔵王^{ざおう} 洋子（85） 無職

荒木 みちる（17） 荒木の妹

荒木 百合（36） 荒木の母

山田 大地（42） 運送会社勤務

女子高生1

女子高生2

運送会社の主任

パチンコ店常連

パチンコ店店員

高校の教師

ゲームセンターにいる父親

金融業の男1

金融業の男2

○パチンコ店 店内

暗い店内。パチンコの騒音。

だらだらとスロットを回している荒木
和馬（18）。手元のメダルが無くな
り、舌打ちをして席を立つ。

○同 喫煙所

小さなガラス張りの部屋。

荒木、電子タバコの電源を付けて口に
くわえる。

スマホにメッセージ「明日シフト入れ
る？」。荒木、あくびをかみ殺しながら
「無理っす」と打って送信しようと
する。

横から手が伸び、荒木から電子タバコ
を奪う。

荒木「んだ、この野郎！」

荒木がすごむと、背の小さな蔵王

洋子（85）が立っている。

洋子、電子タバコを投げて返す。

洋子「ガキがいきがつてタバコなんか吸って
んじやないよ」

荒木「ああ!？」

洋子「出て行きな。狭いんだよ」

荒木「そっちが出るよ」

洋子「あんた未成年だろ？」

荒木「は？ 成人してるわ」

洋子、荒木の全身をじろっと見る。

洋子「どうせ18か19だろ」

荒木「20過ぎてっけど」

洋子「あら、そ？ じゃあ身分証明書」

荒木「今持ってねえ」

洋子「嘘つけ。財布出しな」

荒木「ふざけんなよ」

洋子、ため息をついてポケットから万
札を出す。

洋子「これでいい？ さっさと消えな。私は

ゆつくりタバコが吸いたいんだよ」

荒木「頭おかしいんじゃないかねえの、このババア」

荒木、乱暴にドアを開けて外に出る。

○同 店内

荒木、振り返る。喫煙所で悠々と煙をくゆらせる洋子。

荒木、舌打ちをして店を出る。

○鵜ヶ森高校 教室（夕）

高校生達が帰宅準備をしている。

荒木みちる（17）、帰ろうとする。

女子高生1、女子高生2が声をかける。

女子高生1「みちるー、マック寄ってこ」

みちる「ごめん、今日無理」

女子高生2「いっつもじゃん。なんか用？」

みちる「ちよっと。またね！」

みちる、教室を出る。

○同 廊下（夕）

みちる、バッグの中を探り、教室に戻ろうとする。

女子高生1の声「みちる付き合い悪いよね」

女子高生2「金無いんじゃないの？ 家がほ

ら……」

みちる、足早に立ち去る。

○ 荒木の自宅 外階段（夜）

ぼろぼろのアパート。荒木、音を立てて階段を駆け上がる。

○ 同 玄関 中（夜）

荒木が入って来る。脱ぎ捨てられたパンプス。

○ 同 居間（夕）

玄関を入ってすぐ小さな部屋。

敷きっぱなしの布団。食べかけの弁当。

荒木百合（36）が派手な格好でメイクをしている。

百合「おかえりー」

荒木「まだいたのかよ。さっさと仕事行けよ」

百合「何よ、その言い方」

荒木「みちるは？」

百合「知らない。それよりあんた、学校ちゃんと行ってないんだって？」

荒木「俺に学校行って欲しかったら、ちゃんと生活費を寄こして下さい」

荒木、中指を立てながら言う。

百合、笑顔でスマホを見せる。

百合「見て見て、今月の一位！」

ホストクラブのホームページ。

きらきらしたホストが笑っている。

百合「百合ちゃんは俺のエースだよって言うてくれた」

荒木「いくら使ったんだよ」

百合、指折り数えて得意げ。

百合「30万のクリスタルとー、15万のアルマンドとー」

荒木「馬鹿じゃねえの！ まじでいい加減にしろよ！」

荒木、百合からスマホを奪って投げ捨てる。

百合「やめてよ、馬鹿！」

百合、慌ててスマホを拾う。

百合「あんたのお父さんになってくれる人か
もしれないのに」

荒木「んな訳ねえだろ！ 本気で頭足りねえ
のかよ！」

百合、スマホにキスする。

荒木「つてか、今月の家賃どうすんの？」

百合「ごめーん、これしかないから、建て替
えといてくれない？」

百合、テーブルに1万円を置く。

荒木「全然足りねえから。お母さんの給料入
る口座つてどれ？ 通帳とカード貸してく
んない？」

百合「お母さんなんて呼ばないで！ 店では
25つて事で通してるんだから」

百合、甘えるように言って、バッグを
持って立ち上がる。

百合「ママ、しっかり稼いで来まーす！」

百合、踊るよう足取りで出て行く。

荒木、百合の化粧入れや引き出しの中

を探る。

荒木、舌打ちをして布団に寝転がる。

荒木、壁を蹴る。すぐに隣の部屋から

壁を叩き返される。

荒木、深いため息。

○コンビニ 前（夕）

荒木、地面に座ってカップラーメンを
食べている。

みちる、通りかかり、顔をしかめる。

みちる「お兄ちゃん家で食べなよ。みつとも

ないなあ」

荒木「うっせえな」

みちる「学校、またサボったんでしょ」

荒木「遅かったな。こんな時間まで何やって

たんだよ」

みちる「ちよつとバイト始めたから」

荒木「はあ？ バイトって何の」

みちる「何でもいいでしょ。それよりさあ、

お兄ちゃんお金持ってない？」

荒木「ねえよ。何に使うんだよ」

みちる「友達からデイズニー行こうって誘われたから。来週」

荒木「デイズニー？ 金がねえなら断れよ」

みちる「だって、もう2回も断ってるもん。

ファミレスも、カラオケもマックも……」

みちる、俯いて唇を尖らせる。

荒木「んじゃあ、明日バイト入れっからそれでいいだろ？ 一万」

みちる「二万」

荒木「は？ 一万で十分だろうが」

みちる「高いんだよ、チケットもカチューシ

ヤも、ご飯も」

荒木「コンビニ飯でも食っとけ」

みちる「やだよ、恥ずかしい」

荒木「正直に言えばいいだろうが、金がないから食べませんって」

みちる「そんな事言ったらみんな奢ってくれるんだよ！ 優しいから！ でもそしたらもう、友達じゃなくなるじゃん」

みちる、怒ったように歩いて行く。荒木、残ったカップ麺を見つめる。

○運送会社 倉庫（朝）

制服を着た作業員達が、倉庫から荷物を運んで、トラックに積んでいる。

荒木と山田大地（42）、ペアで仕事をしている。

山田「今日、学校良かったの？」

荒木「平気っす。単位足りてるんで。あ、これ重いっす」

荒木が山田に荷物を渡す。

山田「うりゃ」

山田、気合を入れて荷物を運ぼうとするが、落としてしまう。

ガラスが割れる音。

山田「やべ……。俺、次ミスったら給与査定に響くって言われてるのに……」

荒木が箱を持ち上げると、壊れたガラスの音がする。

主任が走ってやって来る。

主任「ちよつと何やってんの！」

荒木「すみませんでした」

山田、何かを言いかけるが荒木が手で

押しとどめる。

主任「ったく……、お客様に電話するけど、

バイト代から引くことになるよ、いいね？」

荒木、帽子を取って頭を下げる。

○同 自動販売機 前（夕）

山田、ジュースを買って荒木に渡す。

山田「悪かったね」

荒木「いいっす。どうせバイトなんで」

山田「あ、もちろん引かれたバイト代は払う

から」

山田、財布から5千円札を取り出す。

荒木、お札をじっと見つめている。

山田「あ、ごめん、もうちよつと色付けない

とね」

慌てて一万円札を取り出す山田を、冷

めた目で見つめる荒木。

○パチンコ店 店の前（夜）

荒木が店に入る。

○同 店内（夜）

台を物色している荒木。

大当たりしているパチンコを打っている常連が声をかけてくる。

常連「お兄ちゃん。さっき素人さんが、当たりかけの台捨ててったよ」

常連、奥の台を指差す。

荒木「まじっすか」

常連「5万突っ込んだのにまだ当たらねえの。来たら閉店まで帰れねえよ」

荒木「っしや、臨時収入あったんで3倍にします」

常連「そしたらラーメン奢ってくれよ」

荒木、口笛を吹きながら台に向かう。
慌てて店員が駆け寄って来る。

店員「ごめんなさいねー、お客様、この間タバコ吸ってませんでしたか？」

荒木「……いや？」

店員「監視カメラに映ってたんですよー。20未満の方がタバコ吸われると、警察に通報する事になってるんだよね」

荒木「なんすか急に。ずっと黙認してたじゃないっすか」

店員「悪いけどもう、うちの店には立ち入り禁止って事にさせていただきますね」

○同 店の前（夜）

店員と荒木が立っている。

荒木「あのババアが告げ口したんすか？」

店員「失礼します」

荒木「あの人、俺に万札渡して喫煙所追い払おうとしたり、頭おかしいっすよ。あっちこそ出禁にした方が……」

店員「（小声）うちの店主だからね」

荒木「え？」

店員、店内に戻ってしまふ。

荒木、自動ドアを蹴り上げる。

○東海洋高校 教室（朝）

教壇に教師が立っている。制服を着た

30名程の生徒が座っている。

教師「出席取るぞー。荒木和馬君、は今日も

休みか。じゃあ、今井優紀さん」

女生徒「はい」

荒木の席が空いている。

○運送会社のトラック 中（朝）

山田、大型トラックを運転している。

荒木、不機嫌そうに腕組みをして助手

席に座っている。

山田「いや、助かるわ、荒木ちゃんが入って

くれると」

荒木「ういっす」

山田「急にごめんね」

荒木「ってか俺、もっとシフト入りたいうっす」

山田「どうしたの」

荒木「金、欲しいっす」

山田「お金？ 彼女と旅行でも行くの？」

荒木「普通に生活費っすよ。母親離婚してて、
シングルマザーなんで」

山田「えー、大変だね。って言うかももうすぐ
卒業でしょ？ どうするの？」

荒木「大学は行かないっすね。勉強嫌いだし」

山田「じゃあ、就職？」

荒木「そうっすね」

荒木、ぼんやりと窓の外を見つめる。

荒木「俺、会社で雇ってもらえないっすかね」

山田「え？ うちの会社？」

荒木「はい」

山田「うーん、経営厳しいし、無理かもなあ」

荒木「そうっすか」

山田「もうずっと新卒なんて採ってないし」

荒木「…」

山田「あんまりおすすめしないよ？ 体力勝
負だから年取ったらきついし、給料も良く

ないし。何か、やりたいこととかないの？」

荒木「ないです。何でもいいです」

山田「何でもいいのか、うーん」

荒木、ぼんやりと窓の外を見つめる。

○洋子の自宅 前（朝）

立派な門構え。庭のある平屋建ての大きな家。「蔵王」と言う表札がある。

山田、チャイムを押す。

洋子の声「はい」

山田「お世話になりますー。グリーン配達ですー」

洋子の声「入ってちょうだい」

門が自動で開く。

○同 玄関 中（朝）

広い玄関。荒木、山田、ぽかんと立っている。奥から声がする。

洋子の声「こっちよ、廊下入ってまっすぐ」

山田「はい！ 失礼いたします！」

山田と荒木、持参したスリッパを履いて家に上がる。

○同 居間（朝）

広い部屋。立派な調度品。絨毯が敷き詰められた床。

山田と荒木が入って来る。

山田「失礼いたしますー」

ロッキングチェアに座って庭を見ていた洋子が立ち上がり、振り向く。

荒木「（小声）げ！」

荒木、帽子を目深に被る。

洋子「このソファを運んで欲しいのよ」

山田「承知いたしました。新しいソファは同じ位置でよろしいですかね？」

洋子「そうね」

洋子、ポケットから10万出して渡す。

山田「ありがとうございます。家具の撤去と組み立てで36000円の消費税ですので」

山田、お釣りを出そうとする。

洋子「いいわよ、残りは取っというて」

山田「え！」

洋子「その代わり、絶対どこも傷つけないでよ。その棚200万すんのよ」

山田「ええ！ それはもう」

洋子「それからね」

洋子、顎で荒木を差す。

洋子「おたくの所のバイト、この間パチンコ屋でタバコ吸ってたわよ」

山田「え！？」

洋子「若いもんの教育ぐらいちゃんとしなさいよ。家の敷地で吸ったら許さないからね」

洋子、タバコに火をつけながらロッキングチェアに座る。

荒木、声を出さずに「クソババア」と
呟く。

○ 同 外の道（朝）

トラックから大きなソファを出そうと
している山田と荒木。

車がやって来て、クラクションが鳴らされる。荒木、慌てて道に飛び出して、帽子を取って頭を下げる。

荒木「申し訳ありません！」

荒木、汗だくで車を誘導する。

洋子、家の縁側に立って、タバコを吸いながら見ている。

○同 居間

新しいソファが設置されている。荒木、

山田が汗だくで立っている。

洋子、タバコを吸いながらソファを撫でる。

山田「俺、伝票用意してくるわ。すみませーん、少々お待ちください」

山田、走って部屋を出て行く。

洋子、ゆったりとソファに座る。

荒木「じゃあ、僕もこれで」

洋子「あんた、仕事は真面目にやるのね」

荒木「……やっぱ」

洋子「何？」

荒木「店に告げ口したのって、バ……お客様、
なんですか」

洋子、タバコに火を点ける。

荒木「パチンコ屋、出禁になったんすけど」

洋子「そう」

荒木「俺、いや、僕、あなたに何かしました
かね」

洋子、タバコに火を点ける。

洋子「匂うのよね」

荒木「何がですか」

洋子「私が大っ嫌いな、貧乏の匂い」

荒木「ああ!？」

荒木、かっとなって洋子を睨みつける。

洋子「あんた、家でバイトしない？」

荒木「は？ バイト？」

洋子「私が話す事、パソコンで打って欲しい
のよ」

荒木「何すか、それ」

洋子「1時間1万払うわよ」

荒木、一瞬迷うように目を泳がせる。

荒木「金余ってんすね、はは」

洋子「パソコンならあるわよ。設置してもらわないといけないけど。あんた、出来る？」

洋子、部屋の隅にあるパソコンやプリンタの入った段ボールを指差す。

荒木「説明書があれば、多分……」

洋子「お利口さん。明日から来れる？」

荒木、部屋を見回す。

きらびやかな調度品。洋子と、男性と子供が写っている写真がある。

荒木「怒られますよ、ご家族に。こんな、得体のしれない男、連れ込んだら」

洋子、吹き出して笑う。

洋子「家族なんていないわよ。みんな死んだわ」

荒木「え」

洋子「早死にの家系だったのね。生き延びたのは私だけ、ふふ」

荒木、気味悪く洋子を見つめる。

洋子「生命保険もね……。でも、あの世にお金は持って行けないでしょ」

荒木「気に入らねえ……」

洋子「うん？」

荒木「人を金で言いなりにしようとするその態度がっすよ」

洋子「気に食わないのはこっちよ。困ってるなら困ってるなりに人に媚びへつらいなさいよ」

荒木「あんたみたいな人間に頭なんか下げるかよ」

洋子、懐から札束を出してひらひらと振る。荒木、かっとして近づこうとする。

足音がして、山田が入って来る。

山田「お待たせいたしました！こちらが納品書で……」

洋子「はい、ご苦労さん」

洋子、何事も無かったかのように書類にサインをする。洋子を見つめる荒木。

○運送会社 倉庫（夜）

荒木、段ボールの片付けをしている。

山田が走ってやって来る。

山田「ごめんごめん、お待たせ！ もう上が
っていいよ！」

山田、ポケットから3万円を出して荒
木に渡す。

山田「これ、今日のお客さんのチップ。山分
けね」

荒木「あ……」

荒木、受け取るかどうか迷う。

山田「どうしたの、大丈夫。主任にはバレて
ないから」

荒木、札束を丸めるようにポケットに
突っ込む。

山田「あ、そうだ。主任に確認したら、正社
員の話オツケーだって」

荒木「え！？ まじっすか」

山田「まじまじ。荒木君真面目だし、仕事熱
心だから。俺だって荒木君が入ってくれた

ら嬉しいし」

荒木「ありがとうございます……」

山田「その代わり、高校だけは卒業してね。

就職決まった途端になまけて落第なんてことになったらこっちも責任感じるしさ」

荒木「はい！」

荒木、山田に頭を下げる。

○東海洋高校 教室（朝）

30名程の生徒が授業を受けている。教壇で教師が授業をしている。真新しいアクセサリーや文房具を使っている生徒達。荒木、机に突っ伏して寝ている。荒木の制服のズボンは裾が短い。見えている靴下は擦り切れている。

○同 職員室

教師たちが忙しそうに働いている。教師の前に、荒木が立っている。

教師「出席日数足りてないし、テストの点も

ひどすぎ」

荒木「……」

教師「これだと単位あげられない」

荒木「困るんすけど」

教師「自業自得。困るんすけどじゃなくて、

他に言う事ないの？」

荒木、ぎゅっと拳を握り締める。

荒木「卒業したいです」

教師、ため息をつく。

教師「補習。それで成績上がらなかつたら留

年ね」

荒木「はい」

教師「はい、じゃなくて。お願いします」

荒木「……お願いします」

荒木、頭を下げる。

○荒木の自宅 玄関 中（夕）

制服姿の荒木、入って来る。

○同 居間（夕）

みちるが鏡を見ながら化粧をしている。

荒木、部屋に入る。

荒木「おい」

みちる「お兄ちゃん!？」

みちる、慌ててメイク道具を仕舞う。

荒木「友達とディズニーじゃなかったのかよ。

創立記念日で休みなんだろう？」

みちる「これから行く」

荒木「これからって。もう5時だけど」

みちる、露出の高い服の上に慌ててカ

ーディガンを羽織る。

荒木「おい、どこ行くんだよ」

みちる「だからディズニー」

荒木「嘘つけ」

みちる「ほんとだよ」

荒木「じゃあチケット見せてみるよ」

みちる、唇を噛んで俯く。

荒木「おい」

みちる「……行かない事になった」

荒木「何で？」

みちる「ちよつと、都合悪くなって」

荒木「友達が？」

みちる、無視して出かけようとする。

荒木、みちるの腕を掴む。

荒木「だったら返せよ、金。チケット代」

みちる「……返さないとダメ？」

荒木「当たり前だろ。誰が汗水たらして稼いだと思っただよ」

黙り込むみちる。荒木、手を出す。み

ちる、渋々バッグから財布を出し、二

万円を差し出す。荒木、それを取ろう

とするが、みちるが放さない。

荒木「おい」

みちる「だって大学に行きたいんだもん」

荒木「は？」

みちる「私、大学に行きたい。留学もしたい」

荒木「留学？」

みちる「本格的に英語の勉強したい」

荒木「お前、まだ高2じゃん」

みちる「先輩から聞いた。大学行くならお金

いっぱいかかるって」

荒木「奨学金借りりやあいいじゃん」

みちる「奨学金は入学してからじゃないとも
らえないもん。受験料とか、入学するまで
に払うお金とか、たくさんあるんだって」

荒木「そんなん、合格してから考えろよ」

みちる「合格してから考えてたんじゃ遅いん
だよ！」

みちる、荒木から二万を奪い取る。

荒木「お前な！」

みちる、走って部屋から出て行く。

荒木「どこ行くんだよ！」

みちる「バイト！」

荒木「バイトってどんな……」

みちるの姿はすでにない。

荒木、壁を殴る。すぐに壁を叩き返さ
れる。

荒木「うるせえ！」

荒木、鞆から教科書を取り出して読む
が、すぐに投げ出してしまふ。

○ゲームセンター 店内

スロットやパチンコ、メダル落としゲーム等がある。子供が走り回っている。

荒木がスロットをしている。

メダルが無くなる。荒木、舌打ちをして財布を出す。

横から、荒木の膝に一万円が投げられる。荒木、驚いてそちらを見る。洋子が立っている。

洋子「ゲーセンでスロットか。まだ健全だね」

荒木「いらないうすよ」

荒木、一万円を返す。

洋子「バイトの前払い」

荒木、立ち上がって洋子に万札を突き付ける。

荒木「俺はパソコンの設置なんかしねえし、あんたの話も聞かない。一人で勝手にやれよ。俺に話しかけんな」

荒木、財布から100円を出してスロットに入れる。

洋子「慣れてるね。何歳からここにきてんの」

荒木、無視してスロットを回す。

洋子、隣の台に座ってスロットを打ち始める。

子供が騒ぐ声。走り回る子供の横で、親はパチンコをしている。

洋子「子供ほったらかしてパチか」

子供が床をはいつくばって、メダルを探している。

洋子「みつともないねえ」

荒木「あんたみたいな人には分かんねえよ！」

荒木、台を叩く。

荒木「子供の育て方なんて知らないで産んど
もう親だっている。クソみたいな親でも、
一緒にゲーセン来れるってだけで、嬉しい
ガキだっているんだよ！」

子供が、メダルゲームのプッシャーを
乱暴にいじっている。

洋子「ふうん、あんたもその口かい……」

荒木、黙ってスロットを回す。

洋子「悪かったね」

荒木、はっとして洋子を見る。

洋子「みっともないって言ったのは、自分の事を思い出すからだ」

荒木「え？」

洋子、床に這いつくばってメダルを探している子供を見つめる。

洋子「私だってああして、人のおこぼれをいただいて生活していた時があった」

荒木「……」

洋子「私は戦争孤児だ。戦争が終わって日本が必死で復興している時、私ら戦争孤児は敗戦のゴミみたいに扱われてたんだ」

荒木「ゴミ……」

洋子「何でもやったさ、生きる為にね。ああ言うの見てると思い出すよ、あの時のみじめさ、悔しさ……」

洋子、立ち上がってパチンコをしている親の所へ行く。

荒木「おい……」

洋子「ガキにメダルぐらい買ってやんなよ」

父親が気色ばんで荒木を睨む。

父親「あ！？」

洋子「自分ばっか遊んで、子供が可哀そうだろ。ガチャガチャうるさいんだよ。機械が壊れたら責任取れんのかい？」

父親「ああ！？」

洋子に父親が詰め寄る。

荒木、間に割って入る。

父親「何だてめえ」

母親がめんどくさそうに子供の方へ行き、子供の頭を叩く。

荒木「子供は悪くねえだろうが！」

父親「あ！？俺らが悪いって言いたいのかよ」

荒木「ガキの責任は親が取らんだよ！」

慌てて店員が近づいて来る。

父親「表出ろよ」

洋子「ちよつと」

荒木「あんたは帰れよ」

荒木、そう言って店の外に出る。

○ゲームセンター 外（夜）

繁華街の裏通り。

荒木と父親が対峙している。

父親「俺らが何しようと思手だろうが。絡んでくんなよ」

荒木「てめえみてなクソ親見ると、吐き気がすんだよ」

荒木が吐いた唾が父親にかかる。

父親「んだ、こら！」

父親が荒木に掴みかかる。荒木、有無を言わず父親を殴る。

父親「ぐ！」

荒木、黙って父親を殴り続ける。

見に来た洋子が叫ぶ。

洋子「誰か警察呼んで！ 警察！」

父親が荒木を殴り、馬乗りになる。野次馬が集まって来る。荒木、洋子に「あっちへ行け」と手を振る。

○警察署 前（朝）

傷だらけの荒木と、百合が出て来る。

百合「もうほんと止めてよ」

荒木「……」

百合「昨日バースデーだったのに」

荒木「……誕生日3月だろ」

百合「馬鹿。推しのバースデーに決まってん

じゃん」

百合、ため息をつく。

百合「学校に連絡したけど先生は行ってくれ

ないって言うしさ」

荒木「学校？」

百合「ほんと役に立たないよね」

荒木「言ったのかよ、学校に」

百合「まじ最悪。学費返して欲しいわ」

百合、ぶつぶつ言いながら歩く。荒木、

傷ついた手をじっと見つめる。

○東海洋高校 校長室（朝）

荒木、椅子に座っている。

担任の教師が向かいに座っている。

校長は校長席に座っている。

担任「残念だけどね、一週間の停学。荒木君、出席日数も足りてないから、ちょっと卒業は絶望的なんだよね」

荒木「……卒業、したいんですけど」

担任「こつちだって卒業させてあげたいよ？その為に補習の準備だってしてたんだからさ。だけど、暴力沙汰を起こした生徒を、特別扱いする事は出来ないから。留年してでも卒業する？」

荒木「留年は無理です。学費、無いんで」

担任「こうなったらもう、留年するか退学するかなんだよ」

校長が書類を担任に渡す。担任が「退学届」と書かれた書類をテーブルに置く。

担任「親御さんと話し合っただけで」

荒木、校長の方を見る。校長、荒木と目を合わせない。

荒木、側にあつたボールペンを手に取り、名前を書く。

担任「いや、今すぐに決めろって言う訳じゃなくて」

荒木、無視して書類を書き進める。

○運送会社 倉庫（夕）

土砂降りの中、荒木が段ボールを積み込んでいる。山田がやって来る。

山田「主任に確認したけど、やっぱり厳しいってさ……」

荒木「……そっすか」

山田「暴力沙汰はね、ちよつと……」

荒木「……」

山田「いや、残念だよ。せつかく枠設けて待ってたんだけどね、うん」

荒木、乱暴に荷物を積み込む。

山田「あ、それ壊れ物だから」

荒木、乱暴に積み込み続ける。

○荒木の自宅 居間（夜）

真っ暗の中、みちる、体操座りをして泣いている。

荒木、スマホの懐中電灯の明かりのみでコンビニ弁当を食べている。

みちる「最低、もう最低」

荒木、無視して弁当を食べる。

みちる「どうすんの？ 電気も止まって、大家さんも家賃払えって怒ってるし。ホームレスだよ、このままじゃ」

荒木「新しいバイト見つけるよ」

みちる「私の大学は？」

荒木、ちくわを噛みちぎる。

みちる「辞めるぐらいなら高校行かなきゃよかったですよ！ そしたら入学金とか、制服代とか浮いたのに！」

荒木「うるせえ」

スマホの着信音。みちる、泣きながら電話に出る。

みちる「はい、はい、そうです。百合は私の

母です。え？」

みちるの顔が青ざめる。荒木、眉を顰める。

○ 繁華街（夜）

大雨。荒木とみちるが走っている。

古びたビルの前で立ち止まる。

みちる「ここ……？」

荒木「お前、待ってる。動くなよ。なんかあったら警察呼べ。いいな？」

みちる、青ざめた顔で頷く。

荒木、中に入る。

○ 金融業「ベリーローン」 事務所 前（夜）

「ベリーローン」と書かれたドア。怪しげな金融商品のチラシが多数貼ってある。荒木、ドアを開ける。

○ 同 事務所 中（夜）

タバコの煙でくすんだ空気。乱雑な書

類が乗った机が並んでいる。

奥の椅子に百合が座っている。周りに

男1、男2がいる。

荒木、部屋に入る。

百合「和馬―！」

男1「息子さん？ 随分大きいね」

百合「私が18の時の子だから。みちるは？」

荒木「あいつは置いてきた」

百合「え……」

荒木「借金って何すか」

男2「うん、ちょっと座ってくれるかな」

荒木「いいっす、このままで」

男1が荒木の背を押して椅子に座らせる。男2が、借用書をテーブルに置く。

男2「これね、お母さんが借りたお金。最初は200万ぐらいだったんだけど、追加融資とか利息とかで、ね。こうなっちゃって」

書類には500万程の金額が記載されている。

和馬、百合を睨みつける。

百合「明日までに返さないとき、お母さん」

男2「うん、ちょっとキャバだと難しそうだから。ソープに行ってもらおうと思ってる」

荒木「ソープ？ 35のババアですよ。売れるんすか？」

男2「そりゃあちよつと、ハードなこともやってみてもらわないといけないんだけどさ」

百合「だからね、みちるにお金持って来てもらえないかなって」

荒木「何でみちるなんだよ」

百合「知らないの？ あの子、パパ活って言うの？ それで結構稼いでるらしいのよ」

荒木、顔をしかめる。

男1「もちろん君が払ってくれてもいいんだよ。お金、あるかな」

荒木「ないっす。売りでもなんでもして返せよ。てめえがした借金だろうが」

百合「そんなこと言わないでよ、冷たいなあ」
百合の手が細かく震えている。

男2「まあ金額が金額だからね。お子さん達

の生活もあるだろうし。島に行ってもら

う事も出来るけど」

荒木「島？」

男2「売春専門の島があるの、知らないかな」

百合、俯く。震えがひどくなる。

百合「……和馬、これまでごめんね。私、母

親らしいこと全然してこなかったし、最低

だったと思う」

荒木「今更、遅えよ」

百合「ごめん……、でも。和馬、お願い。助けて、助けて下さい」

荒木、百合から目を逸らす。

男1「君、もう帰っていいよ」

荒木、立ち上がるが、百合の姿を見て

その場を動けない。

みちるの声「お兄ちゃん？」

みちるがドアの所に立っている。

荒木「来るな！」

みちる「お母さん！」

みちる、百合に駆け寄る。

百合「みちる、みちる！　お願い。今、お金ある？」

みちる「え？」

百合「いくらある？」

荒木、みちるの腕を掴む。

荒木「帰るぞ」

百合「お母さんお金用意出来ないと、もうあんた達に会えないかもしれないのよ」

みちる「え」

百合「少なくとも今のお母さんじゃなくなっちゃう。怖いよ、助けてよ、助けてよ」

男1「娘さん可愛いじゃん」

男2「まだ高校生？　何年生？」

荒木、みちるをかばうように立つ。

百合「……和馬、今更遅いかもしれないけど。でもさ、私達唯一の家族じゃん。お父さんが暴力振るってる時だって、私……」

百合、腕にある火傷を見せる。

百合「あんたがお湯かけられそうになった時、私が助けてあげたじゃん……」

荒木「……」

荒木、百合から目を逸らせる。

百合「ねえ、和馬、こっち見て。ねえ」

百合、泣いている。百合、荒木の手を握ってむせび泣く。

男1、百合の手を掴んで引き離す。

男1「はい、残念だったね。これからお母さん連れて行くから。おい、車回して来い」

男2が百合の腕を取って立たせる。

百合「やめて！」

みちる「お母さん！ 待って！ おじさんに

頼んでみる！」

男2「おじさんって？」

みちる「いつも、ご飯食べたらお金くれたりする人です。いくら必要なんですか？」

男1「500万」

みちる「え」

男1「あ、でも君がこれから返してくれるって言うなら最初は100万だけでもいいよ」
みちる「100万、100万なら……」

みちる、スマホを操作し始める。

百合、泣きながら男から逃れようとしている。

荒木、強く目を瞑る。握った拳がポケットに当たる。何か入っている。

荒木、ポケットに手を入れる。くしゃくしゃの三万円が出て来る。荒木、目を開ける。

荒木「……俺が返します」

男1「ほう、返せるの？」

荒木「返します。明日まで待って下さい」

百合「和馬……」

男2「君が返してくれるなら何の問題もないよ」

荒木「はい。みちる、行くぞ」

男1「頑張れよー」

男2「いい息子さんじゃない」

荒木、みちるの手を取って事務所を出る。

○ 繁華街（夜）

荒木とみちる、事務所を出て来る。みちる、荒木に抱きつく。

みちる「お兄ちゃん！」

みちる、震えている。

荒木、笑顔を作る。

荒木「大丈夫、大丈夫。男が本気出せば50

0万なんてすぐだから」

みちる「何、するの？」

荒木「先に家帰ってる。鍵かけて、誰か来て

も絶対開けるなよ」

みちる「お兄ちゃん」

荒木、みちるを残して歩き去る。

○ 洋子の自宅 門の前（夜）

土砂降り。傘を差した荒木が立っている。手にはビニール袋。

荒木、チャイムを押す。

洋子の声「……はい。ん？」

荒木「夜遅くにすみません」

洋子の声「何の用？」

荒木「バイトしに来ました」

洋子の声「アポ無しはお断り」

荒木「……」

洋子の声「……この間、大丈夫だったの？」

荒木「高校、退学になりました」

洋子の声「……」

荒木「明日までに金が必要になりました。お願いします。邪魔しないように作業しますから」

しばらくして、門が開く。荒木、入る。

○同 玄関 中（夜）

荒木、そっと中鍵をかける。

洋子の声「廊下まっすぐ！」

荒木「お邪魔します」

荒木、中に入る。靴をビニール袋に仕舞う。

○同 居間（夜）

洋子、パジャマの上にガウンを羽織ってソファに座っている。テーブルにはパソコンを接続しようとした形跡。

洋子「金っていくら？」

荒木「いやまあ、2時間分ぐらい……」

洋子「あっそう。まずはパソコンからやってくれる？」

洋子、テーブルに2万円を置く。

荒木、パソコンの組み立てを始める。

洋子、あくびをしながら見ている。

荒木「何でしたら、お休みいただいても」

洋子「黙って作業しなよ」

荒木、コードを繋いでいく。

洋子「私の事なんか放つといて良かったんだよ」

荒木「俺が殴られなかったら、おばあさんが殴られてましたよ」

洋子「はっ、こんなババア、誰が殴るかい」

荒木「おばあさん、どうしてこんなにお金があるんですか？」

洋子「夫が土地持ちだったし、生命保険やら
何やらね」

荒木「どうして俺なんか金渡そうとするん
ですか？」

洋子、タバコに火を点けて吸う。

荒木「もし俺が500万貸して下さいって言
ったら、貸せますか？」

荒木、冗談めかして言う。

洋子「はっ、そんなもん私からしたらはした
金だよ。でもね、何の理由もなく投資する
程、暇じゃないんだわ」

荒木「母親が借金のかたに売られそうなんす
よ。妹もパパ活なんかやって金稼ごうとし
てるし。もう後がないんすよね」

荒木と洋子、見つめ合う。

洋子「それが本当の話だとしても」

洋子、タバコの煙を吐き出す。

洋子「あんたの家族の話だろ？ 見ず知らず
の他人に貸す金はないね」

荒木「そうっすか……」

荒木、拳を握り締める。

荒木、ビニール袋からカッターを取り出して洋子に突きつける。

洋子、電話の方へ走ろうとする。荒木、乱暴に洋子を掴む。

荒木「動くな！」

洋子「出て行きな！　このごろつきが！　助

け……」

荒木、洋子の口をふさぎ、ダイニングチェアに座らせる。ビニール袋から取り出したロープでぐるぐる巻きにする。

荒木「金はどこにある」

洋子「はっ、今時タンス貯金なんか！」

荒木、黙ってその辺の棚や引き出しを開ける。

洋子「そのグラス70万するのよ」

荒木、グラスを乱暴に床に投げ捨てる。

荒木「通帳、通帳、通帳。どこだよ！」

荒木が洋子に迫る。洋子、唾を吐きかける。

荒木、洋子が座っている椅子を蹴る。

荒木「通帳とカード出せ！」

洋子、無視する。荒木、カッターを洋子の首に突きつける。

荒木「これでもか？ 本気だぞ。俺はもうどうなったっていいんだよ！」

洋子「こんなもんちつとも怖くないね。刺すなら刺しな。あんたの首に噛みついて、刺し違えてやる」

荒木、洋子の首にカッターを近づける。

荒木と洋子、睨み合う。荒木、齒を食いしばる。

荒木「腹が立つんだよ。金があるからってそんなに偉いのかよ」

洋子「そう言う人間がいるからこの世界の経済は回ってるのさ」

荒木「どうでもいいんだよ、金出せ」

洋子「あんたは私と一緒にだ」

荒木「は？」

洋子「あれ」

洋子、顎でパソコンの方を差す。

洋子「あんたに書いてもらおうと思ってた話」

荒木「……」

洋子「私の子供の時の話。書き残しておきたかったんだ」

荒木「……」

洋子「学校でお勉強しただろ。昭和20年3月に起こった東京大空襲。私の両親と弟はそれで死んだ」

荒木、目を見開く。

○（回想）東京の下町

降り注ぐ焼夷弾。

火柱の中、空に吹き飛ばされる人々。

轟音が響く。

洋子の声「雨みたいに焼夷弾が降ってきた。

火柱が立って、人が紙切れみたいに回りながら空に昇っていったんだ」

○元の洋子の自宅 居間（夜）

荒木、カッターを持つ手が震える。

洋子、荒木を睨みつける。

洋子「自分の叫んでる声も聞こえないぐらいのすごい音だった。弟は焼夷弾が直撃して、真っ二つになった」

荒木「……」

洋子「それからは上野駅が私の家だった。戦災孤児なんて悲惨だよ。毎日、誰かが飢えて死んでいくんだ。男の子達からは、女の子は男の人におにぎりもらえるからいいなあなんて言ってたけど、そいつらが私に何をしたか」

荒木、カッターを持つ手が緩む。

洋子「こんなもん怖くないよ。あの時に比べたら」

洋子は自らカッターに身を寄せる。

洋子「泥水をすするように生きて来た。生きる為だったら何だってやったさ。人を見殺しにした事だって」

荒木、後ずさる。

洋子「だから、あんたがやってることだって間違ってるとは思わない。その金庫。番号は右に3、4、5。左に7、7」

荒木「！」

洋子「金が必要なんだろう？」

荒木「……はい」

洋子「私らみたいな人間は、生きる為に何だってやるんだ。地面を這いつくばって、唾を吐かれても、何が何でも生きるんだ」

洋子、金庫の方を顎でしゃくる。荒木、金庫に手を書けようとするがためらう。

荒木、金庫を開ける。中に札束が詰まってる。

洋子「その代わりに、それを持って行くならこのボタンを押す」

洋子、壁にあるSSSボタンを見る。

洋子「私の金だ。黙って持って行かせる筋合いはないよ」

荒木、100万の束を5つ手に取る。

荒木と洋子、見つめ合う。

荒木「俺がやろうとしてる事、間違ってますか」

洋子「生きる為に必要ならやんなよ。けどね、人の為に生きるのは間違ってる」

洋子、椅子に縛り付けられたまま立ち上がる。

洋子「あなたの人生は人のものじゃない。その髪も、血も、命も、全部自分だけの為に使うんだ。それが生きるって事なんだから」

荒木、札束を握り締める。

洋子「私だってまだまだ泥臭く生きてやるさ」

洋子、SOSボタンに近づく。

荒木、カッターを床に落とす。

荒木、札束を握り締める。

荒木と洋子、見つめ合う。

荒木「俺は……、それでも俺は、家族を見捨てられないです」

荒木、部屋から出て行くとする。

洋子、壁にあるSOSボタンを頭で押す。その拍子に倒れる。

サイレンが鳴り響き、「警察を呼んで下さい、警察を呼んで下さい」と言うアナウンスが流れる。

荒木、洋子を助け起こそうとする。

洋子「さっさと行きな！」

荒木、後ずさる。

洋子「行け！」

荒木、走る。

○同 玄関 中（早朝）

荒木、靴を履いて外に飛び出す。

サイレンが鳴り響いている。

○住宅街（早朝）

土砂降り。

あちこちの家に電気が灯り、玄関から外を見ている人もいる。

荒木、金を持ったまま走り出す。

どこからか悲鳴。

警察に通報する声もする。

荒木、一目散に走り出す。

○川辺（早朝）

荒木、走っている。雨で滑って転ぶ。

札束を落とす。荒木、お札を拾う。泥

が付いたお札。遠くでパトカーのサイ

レンの音。荒木、手に持った札束をじ

っと見つめる。

百合の声「助けて、和馬」

みちるの声「おにいちゃん」

荒木、走ろうとする。

洋子の声「あんたの人生は人のものじゃない」

荒木、立ち止まる。強く目を瞑る。荒

木、目を開ける。荒木、力なく札束を

落とす。風が吹き、札束が飛んで行く。

雨が止み、雲間に朝日が差す。

荒木、立ち止まってそれを見つめる。

振り返り、今来た方へゆっくりと歩き

出す。

了

○ 参考文献

『高校生ワーキングプア』

「見えない貧困」の真実』

(ZET スペシャル取材班・新潮文庫)

『浮浪児1945・戦争が生んだ子供たち』

(石井 光太・新潮文庫)